

近大はマグロだけじゃない！ Alternative KINDAI 目次

近畿大学を辞めるにあたって——刊行にかえて

8

第I部 近畿大学、十八年の軌跡 一九九八〜二〇一六

序章 この本を作る理由

12

なぜこのタイトルに決めたのか 授業は誰のものか

第一章 一九九八〜二〇〇一 近大との出会い——批評活動との併走

17

なぜ近大に来たのか 初期の近大勤務 批評活動をめぐって 九・一一テロ 韓国演

劇との交流 多彩な教師陣と卒論のこと 学生との付き合い、教育の実践

第二章 二〇〇二〜二〇〇四 学生たちの活動——近大フェス開催

39

第一回近畿大学芸術フェスティバルの開催へ 第二回近大フェス 第二回から第三回の

近大フェスへ ハイナー・ミュラー・フェスティバル イラク戦争は何をもたらしたか

第三章 二〇〇五〜二〇一〇 大学で何ができるか——唐十郎との仕事——

唐十郎教授と演劇塾 大学は実験の場である 専攻名改称 大学の管理化と文科省の

規制 世界演劇講座開始 若い世代との交流から リーマン・ショックと経済の低迷

第四章 二〇一〇〜二〇一六 大学はどこへ向かうか——統制の下で——

三・一一東日本大震災と原発問題 震災後を語る言葉と行動 メディアの変容 日本の

保守化と教育の反動化——憲法改正と教科書問題 産学協同と近大マグロ 演劇の使命

終章 授業や大学に関して 関西について 106

【補論三題】

1 手段としての〈フェスティバル〉——予期せぬ領域をつくること

「第一回近畿大学芸術フェスティバルを終えて」(西原亮)

2 唐十郎と近大演劇 これまでの上演作品から(西堂行人) 119

3 TOP演習について（西堂行人）

128

第Ⅱ部 学生たちの研究

学生トーク『ゲキセンって何?』（小田嶋源×木崎愛美×駒川梓×平澤慧美×西堂行人）

132

「論考」

- 1 クロマガグロ完全養殖への道のり（木崎愛美）
- 2 入試の動向（小田嶋源）
- 3 近大伝説（平澤慧美）

180 171 163

第Ⅲ部 第二の転機

第一章 転んでもただでは起きない——第二の出立として

194

第二章 「なにもかもなくしてみる」から——太田省吾さんへの賛辞

232

編集後記

年表

## 近畿大学を辞めるにあたって——刊行にかえて

十八年間、お世話になった近畿大学文芸学部を今年度をもって退職いたします。「退職」というと後ろ向きに聞こえるので、わたしはそれを「卒業」と言っています。定年まで、あと五、六年あるのですが、余力のあるところで辞めたいと思っていたので、今がその時機ではないかと考えました。以下、その理由を述べさせていただきます。

十八年間はわたしにとっては十分に長い時間でした。四十代から六十代まで、人生のもっとも充実した時期を近畿大学で過ごしたといっても過言ではありません。その間に実にいろいろなことがあります。教育実践と批評活動の両立、大阪の勤務と関東の自宅との往還。二つの文化圏を行き交うことの差異とダイナミズム。そのいずれもが刺激的であり、この上ない体験だったと思っています。わたしの活動のほぼすべてがそこにありました。

とくに記憶に残っているのは、学生と企画し、実行した三度にわたる芸術フェスティバルです。学生の実行力とパワーに驚嘆しました。三回目の二〇〇五年は「唐十郎フェスティバル」に発展し、それを引き金に二十世紀のレジエンドの一人である、唐十郎氏を客員教授に迎えることができました。とりわけ松本修先生とともに「唐十郎演劇塾」を開講できたこと、二度に

わたって東京遠征できたことも楽しい思い出です。二〇一二年には林公子先生とともに、近畿大学で日本演劇学会を開催できたことも大きな成果でした。近年は卒業生の活躍も目に付くようになり、演劇賞の受賞者も出るなど、手応えを十分感じることができました。

近大は近年、マグロ養殖の大成功や、受験者数日本一など、建学以来の絶頂期を迎えています。好調時だからこそ、それに安住することなく、次にチャレンジしてみたいと考えました。そうした折、ある大学から来年に新しく演劇の理論コースをつくりたいので力を貸してもらえないかというお誘いを受けました。それはとても魅力的なプロジェクトでした。やりがいのある仕事に心が動き、次に向かう絶好のタイミングでもあり、わたしは即座に引き受けました。ただし実際に着任するのは一年後、先の見えない昨今、とりわけ文系に風当たりの強いご時世ですから、果たして一年後にわたし自身も含めて、このプロジェクトがどうなっているか、保証はありません。だが一步前へ出るには、「退路を断つ」べきだと考え、これまでの仕事を整理し、新しい人生へ踏み出すための一年間にしました。仮にプロジェクトが頓挫しても、その時はその時だと覚悟を決めたのです。

わたし自身、批評活動をあと十年ないし十五年は「現役」で続けたいと考えています。そのためにも、ここで一年空白をつくる必要を感じます。自分の都合で身勝手さは重々承知しておりますし、とりわけ舞台芸術専攻や文芸学部と同僚にはご迷惑をおかけしますが、なにとぞご

了承ください。

在籍十八年間の軌跡を残そうと、一冊の書物を学生と計画しました。大学は冒険や実験を行なえる可能性に満ちた場所です。わたしが在籍した十八年間に、さまざまな航跡があり、未発に終わったものの中にも多くの可能性があったことを記録として残しておきたいと考えました。ここ十年ほど、文部科学省や日本政府による大学の管理化は年々、いやましに増大してきたことは否めません。それが本来の教育や大学の存在にいかに関与を及ぼしているか。こうしたことも併せて記しておきたいと思います。

近大の学生は大好きですし、近大には自身のキャリアをアップさせてもらい、育ててもらったことを本当に感謝しています。また大学に在職中、気の置けない友人がたくさんできました。学外で開いている演劇講座などを通じて関西圏に活動の地盤が出来たことも、わたしにとって掛け替えのない財産です。来年度以降も度々関西圏にはやってきますので、今後とも、よろしくお願いたします。

二〇一六年一月

西堂行人

第I部 近畿大学、十八年の軌跡 一九九八〜二〇一六

## 序章 この本を作る理由

\*なぜこのタイトルに決めたのか

——なぜこの本を作ろうと思ったのですか。「近大はマグロだけじゃない！」ってちょっと刺激的なタイトルですけど。

**西堂** 理由は二つある。五月頃、新聞を読んでいたら、文科省が「これから文系のあり方を見直し、理系を推進していく」という内容の記事が目にとまった。「あれっ」と思ったんだ。そうなるって芸術系の大学や学部は真つ先につぶされていくなあって危機感を感じてね。その時ふと思ったのは、「近大って、もしかしたら文科省が考えている理想的な大学なんじゃないか」。近年有名になったマグロの完全養殖っていうのは、要するに理系の研究が産業に結び付いた最高の成功例じゃないか、と。文科省が考えている「役に立つ学問」の典型が近大マグロにある

とすれば、そのお膝元に僕らはいるわけだ。だったら近大マグロに対して、近大の中で芸術系の学科はどんな存在感を示すことが出来るか。そう考えて、近大はマグロだけじゃないってことを主張する本を作ろうと考えた。それが副題にある「オルタナティブ・キンダイ」だ。

もう一つは、舞台芸術は何を学んでいるのか、教師は何を教えられるのか、その「教育」という問題を考えてみたかった。文系は、経済や心理学を除けば、概して直接役に立つ学問ではない。そもそも文化や芸術は、「非実用的」な領域だ。もっと言えば、「教養」というもの自体が「実用」とは対極にある。近大も教養学部が解体されて久しい（二〇〇一年）。とすれば、産業と無縁なものが文系ではないか。だったらなくせばいいか、というと、学問の基礎研究を担うのが文系でもある。近大の農学部の水産学科にしても、マグロの完全養殖に成功するのに悠に三十年かかっている。そのためまぬ研鑽の末に今日の成果があるわけで、本当は基礎研究の重要性を見直す良い例が「近大マグロ」ではないか。

舞台芸術は就職に結びつきにくいけど、一つ当たれば、話題性も大きいし、華やかさや情報発信力も相当なものだ。産業化とは違った回路で、つまりオルタナティブな方向で、舞台芸術専攻の潜在力をもっと発信したい。

これが本を作ろうとした二つの道筋だった。

\*授業は誰のものか

—— 教育がこの本のもう一つの軸なんですな。

**西堂** 従来の授業は、教師が課題を与えて学生がそれに答え、それを教師が評価してそれで終わりというパターンだった。だが、それだけでいいんだろうか。本当にそれで学生は面白がり、満足しているのだろうか。それより学生が自分でテーマを見つけて、それを教師が脇でサポートしていく方がずつと実りがあるんじゃないか。与える、答える、あるいは教える、学ぶ、という関係を、なんとか突破できないものか。それをこの「TOP演習」の授業で実践してみたかった。

そこで僕が思い出したのは、里見実さんというラテンアメリカの研究者との対談だ。（「空間のドラマトゥルギー」現代詩手帖、九六年）「授業は誰のものか」という問いに対して里見さんはこう言った。「それは学生がその時間に自分の頭の中で考えたことが授業の内実なのだ」と。普通教師は、レジュメを作ってそれを順々に解説していき、分かり易くて内容の濃い「完成度の高い授業」を目指す。でも学生はそれをそのまま受け止めているわけではなく、せいぜい三割ぐらいしか聞いていない。むしろその時に教師が発した一つの単語から自由に連想して、授業と関係のないことに考えを巡らしているかもしれない。それも授業の内実なんじゃないか、と里見さんは考える。だから完成度を「目指さない」という方向が教師として大事な肝じゃ

ないか。そういうことを考えた時に教師はなるべくいろんな情報だとか考えるヒントを提示するだけで、答えを出さないうことが重要になる。むしろ疑問だとか、「ちよつとよくわからないな」という感想が生まれるような授業の方がかえっていいんじゃないか。でもそれはなかなか教師として怖いことなんだ。

——それは何故？

**西堂** 舞台も同じじゃない？ 舞台を観ている側と創る側の関係も相似形だと思う。舞台を創る側は観客にきちんとした内容を提示して、テーマをわかしてもらえぬ関係で進んでいくと、うまくいってるように思える。でもそれって、結局観客は受け身になって、上（舞台）から下（観客）にメッセージや意味が伝達される近代的な関係と同じなんだ。授業も舞台も同じ問題を抱えている。その時、舞台を空白にしたり、授業を空白にして、観客なり学生なりが自分たちで何か行動し、発見していく、そういう授業ができないか、と考えた。はつきりこうなんだ！ ああわかった！ というような授業じゃなくて、なるべくもたもた進めながら、なんだろうこの授業は、この先生何したいんだろうっていうような疑問が生じてくるような授業を目指してみた。学生がその場で何か考えるような材料は僕の方で提示するけど、後はそちらで解決してよ、という投げ出し方。とくに前期に扱っていたのは、近畿大学のことや舞台芸術専攻、つまり自分たち自身のこと。そんなことを考えていたら、結果として、TOP演習の授業

でたどり着いたのが、本を作ってみようかってこと。まあこれも実は僕が提案しちゃったんだけど（笑）、ある時にふっと思いついちゃったんだ。ああこういう内容のことを本にしてみたらいいんじゃないかな、って。でもそれは学生との阿吽の呼吸だったと思うよ。

それがすべての始まりだった。